

いじめを無くすために大人のできること

— 子ども世界の全体を見る姿勢を —

能力開発工学センター
矢口みどり



学校におけるいじめが問題になっている。いじめの問題を考えると、いつも思い出すことがある。私の子どもがまだ保育園に通っているときの出来事である。

2才児（4月1日の時点で2才、その年度のうちに3才になる子ども）のクラスでの保護者会で、ある母親が「近頃うちの子が言うことを聞かなくて」と娘（Aちゃん）に対する愚痴をこぼし、「（生まれたばかりの）下の子をいじめます」と悩みを打ち明けた。ところが、それを聞いた主任保育さんは、ニコッと笑って言った。「それで安心しました。」

いぶかる母親（私たちも含めて）に対して、主任保育さんは言葉を続けた。「このごろAちゃんは保育園であまりにいい子なんで、お家でどうしてるか気になっていたんですよ。お家ではわがママを言って発散できているわけですね。」

2～3才前後というのは、自我に目覚める時期であるという。従って大変自己主張が強くなる。同時に自分以外の他人というものにも関心が出てくる時期でもあり、それまでは一人遊びであったのが仲間を作って遊ぶようになっていく。しかしそうになると、保育への抵抗も出てくるし、他の子どもとのぶつかりあいも毎日なにかしら発生するようになる。そうした時期に、あまりにいい子で自己主張せずにいるのは、自然な状態ではない。精神的に抑圧がありはしないかと、主任保育さんはAちゃんのことを心配していたのだ。

「叱るのではなくて、Aちゃんの気持ちを聞いてあげてください。」主任保育さんは、母親たちに、子どもの生活する世界に対する視点を広げ、子どもの気持ちの受けとめ方を示唆してくれたのである。なるほど、目からうろこが落ちる思いであった。

「子どもの成長過程」と「子どもの生活している世界」の全体像をとらえて、そこから子どもを見る。それはよく考えてみれば当たり前のことなのであるが、親も教師も、その他の者たちも、つい自分の見ている部分だけで子どもをとらえがちになってしまっている。子どもが何か事件を起こしたときに、親たち教師たちが「うちの子（生徒）に限って……」と口走るのは、そうした状況を示していると言えるだろう。

自分の見ている子どもは、彼（彼女）の一面にすぎないのである。彼（彼女）は自分が見ていない世界でも生活している。そこでどんな緊張があるのか。葛藤があるのか。そして、それらが子どもの行動に影響をもたらしていないか。そうした視点を持って子どもをとらえる姿勢が必要であると思う。いじめられる側より、それはいじめている側に必要な視点であるように思う。彼らがなぜいじめ行動を起こすのか、そこにならがあるのか、それを見つけださなければ、いじめはなくなる。

いじめ行為の発生は、大人の予想以上に早い。私の子どもが通っていた保育園でも、何件かのいじめ事件が発生し、そのうち1件にはうちの息子も絡んでいた。息子は身体が小さかったので、いじめの対象になっていたのだが、時には大将となっていた子の命令で、いじめ行為のお先棒を担ぐようなこともしていたらしい。

いじめの発見は、役員会で早めに園に集まった親たちが偶然その現場をみつけたからであるが、数人を従

え大将となっていじめていた子は、保護者会では、保母さんたちにリーダーシップがあるといつも褒められていたし、母親が家でも本当にいい子だと語っていた子だっただけに、目を疑った。いじめられていた子の親からの聞き取りでは、こうしたいじめは、日常的に行われていたらしいということだった。

彼は常に良い子でいることにストレスを感じていたということがあったかもしれない。保母さんたちがリーダーシップとして褒めたものを、力で他を従えることと受けとめたのかもしれない。子どもを子どもの世界全体でとらえるというのは、親だけではできない。また教師だけでもできない。いくら全体を見ようとしても物理的に不可能な部分があるからである。親のしているもの、教師のしているもの、その他子どもをめぐる人が見ているものを総合して初めてその子の全体がとらえられるのである。親と教師の連携、親同士の連携、また地域との連携が欠かせない。

保育園でのいじめ事件では、働く親同士ということで協力し合う姿勢をもっていた親たちは、いじめていた子の親子といじめられていた子の親子と一緒に遊びに行くなどを皆で計画し実行、早期解決が出来た。しかし、あまり親しくなかった親子との関係の修復はあまりうまくいかなかった。

いじめの問題とは、子どもを社会の財産として「共に育てる」という姿勢で大人たちがいかに連携できるのかという問題なのかもしれない。

(能力開発ニュース37号/1996年掲載のものに加筆)